

国語科総合単元づくりのための教材開発と指導法に関する基礎的研究 (I)

——単元の主題をいかした多様な教材編成とその指導法の開発——

山元 隆春 佐々木 勇 杉川 千草 加藤 秀雄
居川あゆ子 木本 一成

1. はじめに

私たちは、過去4年間にわたって、小中一貫教育における国語科カリキュラムの試案をつくり、実践をとおして、単元開発、指導法の改善、カリキュラムの見直しを行ってきた。小学校と中学校で研究領域を共通化し、文学的文章教材から音声言語教材、作文教材へと広げながら、実践・研究を続けてきた。そして、昨年度は、メディア教材を共通領域にして、単元開発を行った。これは、広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校が実験的に試みている新領域「国際コミュニケーション」(異文化コミュニケーションとメディア学習を中核とする開発研究)と、国語科との関連を図ることが重要であると考えたからである。実際には、小学校での「広告づくり」、中学校での「読みの図式化」のように、文字言語をもとに視覚的な媒介を用いた表現へと展開する授業を行った。

昨年度の実践からは、次のようなことが明らかになってきた。

ア. 情報発信の立場の体験の重要性

広告の鑑賞から制作へという活動の展開によって、子どもたちを情報の発信者の立場に立たせることができた。情報の発信者に立つことによって、言葉の使い方、絵の表す意味、レイアウトの仕方など、鑑賞の段階では気づけなかった作り手の工夫を次々見つけていくことができた。また、情報発信者の立場に立つということは、読み手の反応を考慮する活動を促すことにもなった。

イ. 情報機器への関心と効果的な活用

子どもたちの情報機器への関心は極めて高い。授業者が、言葉による表現を重点的に指導しようとしたにもかかわらず、子どもたちは、デジタルカメラ、コンピューターなどの映像機器を使った言葉以外の情報(絵、写真)を用いた活動に多くの時間を費や

した。言葉の学習がおろそかになる危険性はあるが、自分の思いを言葉だけで表現するには未だ発展途上であるという子どもたちの実態を考慮すれば、映像情報が子どもたちの表現を補い、新たな可能性を切りひらく側面をもっているといえる。

ウ. 図式化による読みの深化拡充

子どもたちにとって、テキストから読み取った内容を、図式化という方法で視覚化するのはなかなか骨の折れる仕事である。できあがったものを客観的なものにするのは、なおさらである。しかし、漠然とした初発の読みは、このような過程をへて、少しずつはっきりとした読みへと変わっていった。図式化という手続きが、繰り返し読み直すことを促し、精確に読もうとする態度を促したといえる。また、図式化したものは見比べることを容易にし、互いの読みを吟味しあうという活動を促すことができた。

さて、このような成果をもとに、本年度からは、小から中への系統性をより明確にしていくことを目標に、新たな研究題目をかかげて取り組むこととした。研究領域を、昨年度と同じメディア教材に限定し、小学生から中学生への段階的な発達を視野に入れながら、言葉について系統化された知識や技能の習得、関連づけられた活動、言葉・自己・他者についての認識の深化拡充の様子を明らかにしたいと考えた。

2. 研究の構想

(1) 子どもたちの姿

小学生も中学生もメディア教材や情報機器への関心は高い。また、授業の中にビデオカメラを取り入れただけでも、子どもたちの意欲は高まる。しかし、メディア教材の授業の様子を見比べると、小学生と中学生の間には大きな違いがある。

たとえば、小学生は、目の前の風景がカメラをと

して記録されたり、再生されたりすることだけでも興味をいだくのにに対して、中学生は撮影方法や撮影対象へも注意を向けている。記録することそのものへの関心と、イメージどおりに記録することへのこだわりの違い、ということもできるかもしれない。また、テレビなどの情報についても、小学生はそれを鵜呑みにすることはしないにしても、中学生のように分析的に見ることは少ない。もっとも、メディア情報や情報社会に対する中学生の接し方には、必要以上に批判的であったり、特定の立場に偏ったり、自分との接点が希薄であったり、というような問題も多く見られる。

(2) 研究の目的

小学校から中学校へのメディア単元の配列を、仮に「模倣」から「情報の加工」へという視点で編成してみる。たとえば、小学校では、テレビ番組をまねて実際にやってみる（体験）をとおして、メディアの特徴を理解させる。それを受けて、中学校では、表現者の思いや意図に重点を置き、情報を加工したり、脚色したりすることをとおして、よりよい自己表現の姿を追求させる。このような小・中の関連性に基づいて実践することをとおして、系統的なメディア教材の単元開発の可能性と課題を明らかにしたいと考えた。

(3) 単元構想

対象として選んだ学年は、小5と中2である。小5は、「ニュース番組」をつくる単元で、中2は、「討論番組」をつくる単元である。単元化にあたっては、できるだけ両者の間で、ねらい、教材の種類、活動、教育機器などについての条件をある程度共有化した上で行うこととした。具体的には、次のとおりである。

ア. 育てる力

学習のねらいを、論理的思考力とコミュニケーション力の育成の二つにする。

イ. 読み物教材とメディア教材

単元を、読み物教材とメディア教材の二つで編成する。

ウ. 映像機器の活用

実際に子どもたちが、家庭用ビデオカメラを使う場面（操作と視聴）を設定する。

エ. 放送局のスタジオという状況設定

教室を放送局のスタジオに見立てて、カメラの向こう側（視聴者）を意識しながら、情報を伝える、という状況設定にする。

オ. 放送原稿づくり

放送に先だって、事前に取材や討議を経て、放送原稿をつくるという過程を設定する。

カ. 役割分担と共同作業

子どもたちをいくつかのグループに分けた上で、

出演者、カメラマン、制作者、視聴者などの役割に分ける。番組づくりは、それぞれの役割を意識しながら、共同作業で行う。

このように条件を統一した上で、次のように、それぞれの特徴を出したいと考えた。

〈小5〉

「事実をいかに分かりやすく伝えるか」に重点を置いて、実際のニュース番組を見たり、アナウンサーの話し方をまねたり、原稿の書き方を学んだりする。身近な出来事（事実）をどのように分かりやすく伝えるかがねらいなので、「事実と感想の区別」「順序」「特殊と一般」などの論理的思考や、一方向ながら視聴者を意識した話し方というコミュニケーション力の育成が期待される。なお、ビデオカメラの使用は、言語以外の情報を伝えること、話し方をモニターすること、視聴者を意識することなどに効果を発揮するものと思われる。

〈中2〉

「自分の思いをいかに表現するか」に重点を置いて、異なる立場を理解したり、反論のための材料を探したり、話の展開を工夫したりして、虚構の討論番組をつくりあげていく。討論を通して、問題の本質を明らかにするとともに、設定されたテーマと自分とのかかわりを見つめ、自分が主張したかった真実を見つけだすことがねらいなので、「異なる立場」「反論」「特殊と一般」「対比」などの論理的思考や、相手の反応を予想しながら主張しあうというコミュニケーションを経験することができる。また、ビデオカメラの使用は、討論会の臨場感を高めることと同時に、虚構としての討論を演出するという点において重要な役割を果たすと期待される。

(4) 研究の視点

実際の授業は、次の4つの視点に留意しながら行う。また、本実践を振り返る際には、この4つの視点に沿って分析・考察することとする。

ア. 論理的な思考力

イ. コミュニケーションについての知識・技能

ウ. メディアについての知識・技能

エ. 他者とのかかわり

3. 実践1

(1) 単元・授業の構想

① 単元名 メディアをつくろう

「ニュースを伝え合おう」(小学校5年)

② 単元について

ニュース番組は事実を正しく客観的に認識する取材の上に成り立ち、厳選された情報を効果的に発信する

メディアである。本単元でニュース番組を題材として扱うことにより、事実を見つめ取材する力を養い、収集した情報を厳選して原稿を作成することを通してニュース番組の構成を理解し、相手を意識した効果的な伝達方法について学ぶことができる。また、5年生の半ばを過ぎようとする今、これまでに身につけてきた力を総合的に発揮しながら、学習を進めることができる教材でもある。子どもたちには、番組を構成していく体験を通じて相手を意識した伝達方法を学ばせていきたいと考えた。

指導にあたっては、実際にニュース番組を分析することを通して番組構成をつかみ、その伝達手段としての特徴や工夫を学ぶことができるようにする。また、子どもたち自身が取材活動を行い、身近なテーマを扱いながら番組作りを行っていく中で、情報の担い手と受け取り手の意識についても取り上げる。原稿について取り上げる際、実際のニュース番組と自分たちの作成した原稿をくらべることを通して、番組制作の工夫について考えさせ、お互いに意見を述べ合い、効果的に思いを相手に伝える方法について考えていくことができるようにしたい。

③ 単元の目標

- ニュース番組をつくることを通して、ニュースに興味を持ち、メディアの担い手としての自覚を持つことができるようにする。
- 自分の意見をはっきりさせながら、ニュース番組作りについて話し合うことができるようにする。
- 伝えたいことを意識しながら、工夫して原稿を書くことができるようにする。
- ニュースの内容を的確に押さえながら、伝えたいことをとらえることができるようにする。

④ 単元の計画 (全10時間)

第1次 ニュースについて知ろう……………2時間

第2次 ニュース番組をつくろう……………7時間

- ・ 題材と構成を決めよう
- ・ 原稿をつくろう
- ・ 番組を仕上げよう

第3次 ニュースを伝え合おう……………1時間

(2) 実際の授業の様子

〈第1次〉ニュースについて知ろう

実際の学習に入る前に、テレビ番組についてのアンケートを行い、ニュース番組に対するイメージについても調査した。

- ・ 占いなどいろいろなコーナーがあっておもしろい。
- ・ 新しいことがわかるので好き。

- ・ 同じことを何度も言っているからきらい。
- ・ むずかしい言葉がいっぱい出てくるので、(ニュースは)きらい。
- ・ ニュース番組は、テレビ画面にごちゃごちゃ字が出てきてわかりづらい。

また、単元の導入では、ニュース番組についてのイメージを持ちやすくするために、子どもたちにとってわかりやすい題材を扱った実際のニュース番組の一部をみせた。

P：その場所の映像があるのでよく分かる。

P：アナウンサーの話し方がおもしろい。

P：画面に出てくる文字がくふうしてある。

P：言葉がむずかしいと思っていたら、きちんと説明があった。

映像メディアの持つ力はやはり大きい。子どもたちは、実際の映像を熱心に見ていた。そして、ニュース番組も伝え方次第で、おもしろく、分かりやすいものになるという確信を得たようであった。

〈第2次〉ニュース番組をつくろう

子どもたちが実際にニュースを伝えるにあたって、持ちよった題材について交流し、自分たちのつくりたいニュース番組の構成について話し合った。子どもたちが持ちよったものには、実際のニュースや新聞などで報じられているような題材もあったが、学校や地域・家庭の話題も多くみられた。

題材の決定に関わって、教師はそのニュースを聞いたり見たりした人がどんな感じを受けるかということについてアドバイスをしている。事実をゆがめて報道することはまちがっているという認識は子どもたちにもあったが、伝えようと意図していること以外の情報も伝わる可能性があるということも全体で考える機会を持った。

話し合いの中で、映像や写真・具体物などを入手し、実際に番組の中で扱えそうな題材を選んでいったようである。これは、見る側にとっても重要なことであり、より視聴者に訴えかけるためには、現実味のある、より具体的な材料が必要であると感じたようであった。

P：長生きのクワガタの話題にします。ほくのクワガタなんだけど…。

P：ヌートリアのことをしたいけれど、噂だけで実際に見た人がいないんだよ。

P：スポーツランキングに決めました。

P：おもしろい話題にしたいんだけど…。

P：迷いパトの話だったら○○さんが見つけたからインタビューできるよね。でも、写真がないよ。題材を決め、番組構成について話し合いを持つにあ

たり、それまでは、番組制作に対してあまり意欲的ではなかった子どもたちも実際の活動に見通しが持てるようになると、積極的に意見を出し始めていた。

P：インタビューを入れた方がいいよね。

P：バックに音楽があるといいと思う。

P：今度の時間のビデオを撮っておきたいね。

P：写真を撮っておきたいね。

キャスター・アナウンサー・レポーター・インタビュアー・カメラマンといった言葉を紹介していくと子どもたちは、各自の役割を決め、協力して活動を進めていった。

展開を話し合った後、原稿作成に取りかかった。自分たちのニュース番組の中で実際に使おうとする題材がそろっていくにつれて、より明確に番組の流れが意識できるようになってきた。そこで、教科書の原稿例等も参考にしながら原稿作成に取り組んだ。

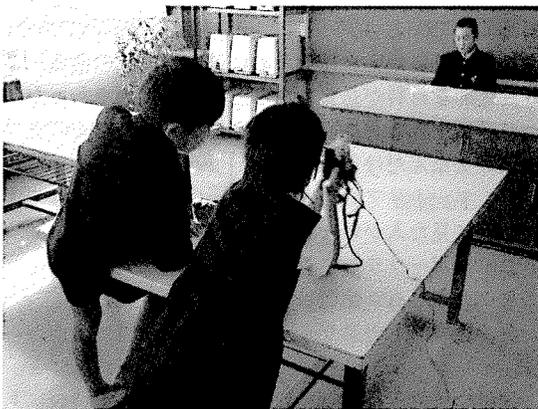
〈子どもたちのふりかえりから〉

- ・ ○○さんのとった写真が良かった。番組の中でうまく使いたい。
- ・ インタビューがうまくできたと思う。
- ・ 何とか原稿が完成しました。練習をして、はっきり伝えられるようにしたいです。
- ・ カメラがぶれてしまうので、さつえいのときには気をつけたいです。

原稿が完成すると各グループごとにその作成した原稿をもとに練習に取り組み、その様子をビデオに撮影した。実際のニュース番組を見比べながら、自分たちの番組をふりかえる材料にした。この後、修正した原稿をもとにリハーサルを行い、本番撮影を行った。

P：解説はキャラクターがします。ピタくんです。
(言いながらキャラクターを見せる。)

P：インタビュアーがスタジオに登場して、感想を



言うようにしました。

P：ハトの写真もないし、紙芝居にしました。音楽も入れてドラマ風にしています。

当初は原稿も事実を伝達するのみであったが、ここに来て、場面転換などによる視聴者の注目の仕方なども意識するようになってきた。

〈第3次〉ニュースを伝え合おう

単元の最後に、今までの学習でできあがった原稿をもとにニュース番組を伝え合い、学習の深まりを確認した。

〈子どもたちの感想から〉

- ・ ニュース番組にはたくさんの工夫があることがわかった。
- ・ カメラのぶれやズームが難しかった。
- ・ ニュースキャスターは、意見をしっかりとっているし気をつけていることがたくさんある。
- ・ たくさんの人の協力が必要なのだということがよくわかった。
- ・ インタビューや現地の取材の様子などを入れるとおもしろいしよくわかる。
- ・ 話す速さや調子に気をつけないといけないことがわかったし、ときには冗談なども入れながら話すと見ていてあきない。

(3) 授業をふり返って

学習を通して、子どもたちの表現に対する意識が高まったように思う。そして、お互いを尊重し合い、ひとつの活動を通してともに学び合う姿が見られた。同じ事実を伝える場合でも、表現の仕方によって、情報を受け取る側の印象は変わってくることに気がついた。また、学習の中で改めて気がついたことだが、伝えようとしている内容以外の情報も、受信する側は受け取ることを意識し、受信する側の受ける印象を考えながら情報を発信していかなければならないことも学ぶことができた。

本単元では実際に映像メディアを扱い、取材活動を通して題材を選び、原稿を作成するという活動を経ている。この活動の中で、子どもたちは、自分たちが伝えたい内容を表現することに対し意欲的に取り組むことができた。しかしながら、ニュースを伝えるという「話す」活動と番組中で実際に提示する文字情報・図や写真といったものの組み合わせ方を考え番組制作に取り組む際に、イメージや見通しを持ちながら活動を進めていくことは難しかったようである。また、技術面での負担も大きく、結果的には機器を扱う技能が向上したものの、視覚的な情報に意識が向き、言葉によ

る表現を十二分に吟味できたかどうか不安要素が残る。モデルとなるものをいくつか用意しておき、自分たちの考えと近いものを参考にできるようにすることや、環境のさらなる整備が必要であろう。

4. 実践2

(1) 単元の構想

本単元は年間学習計画2学年第7単元「私の国語学習」として設定したものである。この単元は、これまでの国語科学習での経験を受け、自分の興味・関心や課題意識を生かして主体的に学習に取り組むことができること、自分の考えを論理的に表現し広く他の意見や情報から学んで自分のものの見方や考え方を深めることができること、さらには、既習事項や創意工夫を生かして学習に取り組み、国語の力をいっそう確かなものにしたたり、主体的学習の楽しさを実感したりすることができることをねらいとして設定している。

今回は、主目標を「話す・聞く」に設定し公開討論番組づくりに取り組んだが、さまざまなメディアから情報を収集させ、「生きること」の意味について感じたり、考えたりしたことをまとめる中で、「読むこと」「書くこと」の活動もずいぶん取り入れたものとなっ

た。

また、単に討論の技術や、番組制作のスキルを身につけさせるだけではなく、学習を通じて、自己の視野を広げ、生徒がこれからの人生を肯定的に生きることができるよう、前向きな人生観を持たせようしたいと考えた。

① 単元名：様々な情報を活用しよう 公開討論番組
「生きるとは？—人生に希望はあるのか—」

② 単元について

『想う』（五木寛之 東京書籍）で筆者は「人間誕生についての3つの真理」を述べている。これを受け、「生きること」をテーマに、さまざまなメディアから情報を収集し、それらをもとに、自分自身の人生の意味について感じたり、考えたりしたことを討論番組としてまとめ、表現することで、自らの視野を広げさせ前向きな人生観を持たせたい。「生きることの意味」について考え、友達と意見を交換することは、この時期の生徒にとって大変重要であると考えた。

③ 目標

○ 自分の生涯をイメージし、自己を肯定的にとらえさせ、前向きな人生観を持たせることができるようにする。

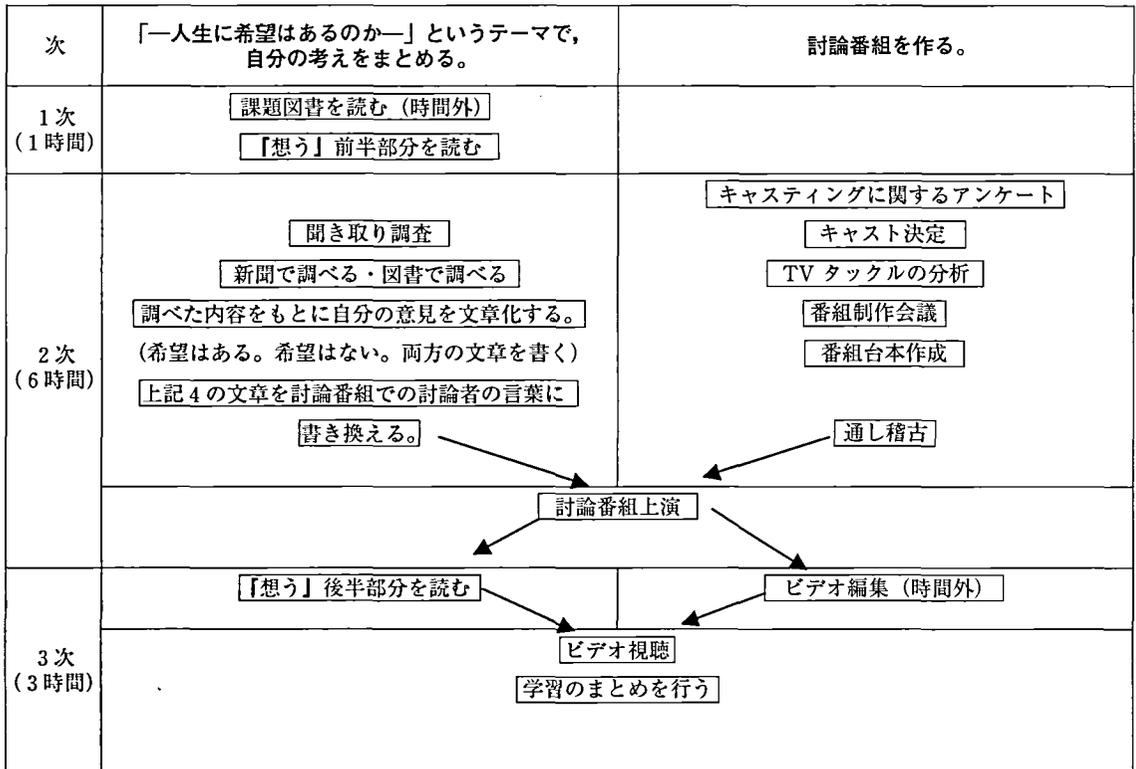


図1 単元の学習の流れ

- さまざまなジャンルから「人生」「生と死」をテーマに情報を収集させ、それらをもとに自分自身が「生きること」の意味について感じたり、考えたりしたことを発表することができるようにする。
- 番組を演じさせたり、他者の発表を見させたりすることで、「生きること」について考え、自分の視野を広げることができるようにする。

(2) 指導計画

本単元は、次の二つの学習内容を同時進行で行った。

- ① 「一人生に希望はあるのかー」というテーマで、自分の考えをまとめる。
- ② 討論番組を作る。

(3) 実際の授業の様子

① 脚本作り

授業の実施に当たっては脚本作りが大きなポイントとなった。

- | | | | |
|---|----------|---------------|---------------|
| 1 | 制作会議 | 大まかな流れの決定 | ディレクター・脚本係・教師 |
| 2 | 構成台本作成 | ディレクター・脚本係・教師 | |
| 3 | せりふ案作成 | 脚本係・(教師) | |
| 4 | せりふ作成 | 全員 | |
| 5 | 脚本作成 | 脚本係・(教師) | |
| 6 | せりふ校正 1 | 全員 | |
| 7 | せりふ校正 2 | 脚本係 | |
| 8 | せりふ読み合わせ | 全員 | |
| 9 | 脚本完成 | 脚本係・(教師) | |

上の1～9にあるように脚本の構成と調整は脚本係・ディレクターが行い、せりふ作りはチーム全体が関わるようにした。

せりふ作成の一例を挙げる

① 生徒配布用紙

討論者A

意見 いいえ、そんな中でも、希望の光はあります。地震発生後92時間ぶりに救出された皆川優太ちゃんです。

事実()
意見()

② せりふ作成

討論者A

意見 いいえ、そんな中でも、希望の光はあります。地震発生後92時間ぶりに救出された皆川優太ちゃんです。

事実 優太ちゃんは92時間も車に閉じ込められていました。だけど車と岩とのほんのわずかな隙間に入っていて奇跡的に救出されました。

意見 そのことについて、車と岩とのわずかな隙間で奇跡的に助かってすごいと思いました。奇跡とはこのことだと思います。

③ せりふ校正 1

討論者A

意見 いいえ、そんな中でも、希望の光はあります。地震発生後92時間ぶりに救出された皆川優太ちゃんです。

事実 優太ちゃんは92時間も車に閉じ込められていました。だけど車と岩とのほんのわずかな隙間に入っていて奇跡的に救出されました。

意見 地震で被害を受けられた方にとっても、そうでない方にとっても、優太ちゃんのあの姿は、希望の象徴だったと思います。幸い優太ちゃんは救出後順調に回復し、つい先日病院を退院することができました。

この後、せりふは脚本係によって、全体の中での調整が行われ、さらには、このせりふを担当する討論者自身によって、話しやすいように微調整がされた。

(4) 授業を振り返って

① 意中のキャスティングで意欲化を図る

番組作りは何よりもチームワークが必要となる。それぞれが自分の役割を自覚し、積極的に活動したチームは、番組制作をスムーズに進めることができた。

自分は脚本や討論をする立場ではなかったけど前日の準備などで自分の仕事を全うすることができました。私達会場・記録係はあまり仕事がなくてやりがいもないと思っていたんだけどそれをしてから自分のしたことが自慢できるようになりました。……略……実際に本番で演じている人たちと一体となって、収録を楽しんですばらしいものにするという気持ちを持つようになりました。(会場・記録)

キャスティングの際は、アンケート調査での生徒の希望を重視し、なるべく第1希望もしくは第2希望希望の中で進めていくことがその後の授業を活性化させるポイントとなった。

② 脚本作りで論理的思考力を養う

脚本作りにあたって中心となるのは無論脚本係であるが、その元となる意見は、資料(新聞・本・ニュース映像・聞き取り調査)を元に全員が賛成・反対両方

の立場で自分の考えを文章化し、出し合った。その際、出された意見を、賛成・反対、多数・少数、一般・特殊といった具合に分類する中で、生徒は他者との対話・自分自身との対話を重ね、自分自身の考えを深化させ、人生について色々な側面から考えることができるようになった。

できるだけみんなの意見を取り入れることに特に専念してみると僕自身様々な知識をたくさんもらい脚本を作ることができました。頭の中でミニ討論会を行うと楽しくできました。所々に僕の意見を入れ、この番組はどういう考えかみんなに考えてもらいたかった。
(ディレクター)

その結果、テーマとしては今までにないほど重いものであったにもかかわらず最後まで投げ出すことなく意欲的に課題に取り組むことができた。

③ 見せる討論

番組出演者の中には、役になりきって、せりふを話すのか、それとも自分の意見を言うのか、戸惑う者もいた。実際授業の最初では、ただ、紙に書いてあることを読むだけという生徒が多かった。そのジレンマからか、台本無しで自由に討論すればいいではないかという感想を口にするものもいた。しかし、役作りが進み、せりふが自分の中に落ちていくと同時にその戸惑いもなくなっていったようである。

この学習をやってみて普段テレビで見ている討論番組の裏にいろんな工夫があることがわかりました。見るだけだったらいろんな改善点が見つかるけど、いざ自分でやってみるととても難しくどこをどう直したらいいかも分からなくて悩んだりしました・・・(略)・・・本番では、一人ひとりその役に合った形で台本の言い方を変えるなど工夫できてよかったです。
(討論者)

5. 考察

実践1, 2を行って分かってきたことを、研究の視点に沿って考察する。

① 論理的な思考力

「事実」について、小5の子どもたちは、事実と意見の区別の重要性はもともとよく自覚できている。新たに本実践から見えてきた知見は、「事実のとらえ方」についての認識の深まりである。子どもたちは、原稿づくりの過程で、「事実をゆがめて報道することはまちがっている」と言いながらも、一方では、「伝えよ

うと意図していること」も大切であると考えている。ここで子どもたちが悩んだ「事実か、表現者の意図か」という問題は、客観性が重視される論理的表現においても、事実は決して客観的なものではなく、表現者の意図と密接な関係にある、ということを学ぶきっかけになる重要な内容を秘めている。

一方、中2では、賛成・反対の立場を明確にしたことで、反論という思考が促され、意見そのものよりも相手を取り上げる根拠に対して反証をあげようとする活動が見られた。その過程の中で、「全体と部分」「特殊と一般」という論理的な思考とともに、取り上げた問題と自分との関係にこだわろうとする姿勢が見えるようになってきた。子どもたちは、討論するという活動を、単に形式的な論理の対決とは考えず、自分の主体の問題として取り扱っていきようとしている点で有意義な議論になる可能性を秘めているといえる。

いずれの実践も、結果としては当初の目的を十分達成したとはいえないが、形式的な論理的思考から抜け出そうとしている点で有意義であったといえる。

② コミュニケーションについての知識・技能

小5も中2も、グループ活動の中で一人ひとりに役割を与えているが、これがコミュニケーションを活発にする要因になっている。一つのせりふをめぐって、それぞれの立場から見えた問題を出し合い、話し合っただけでよりよいものに改善していこうとしている。その中で、相手の立場を考える、相手には自分がどう映っているかを想像する、相手の反応を予想する、といった活動が行われているようであった。また、中2の子どもたちの中には、コミュニケーションの様子を頭の中でモニターしながら話し合いを進めようとしているものもあったようである。

ところで、主要なコミュニケーションスタイルを、一方向の伝達(小5)から双方向の伝達(中2)へと段階的に仕組んでみたが、前者はともかく、後者についてはなかなか期待したような成果は見られなかった。事前に脚本を作り、フィクションとしての議論を展開しようとしたにもかかわらず、相手の思いをくみ取り、それにかかわらず自分の思いを述べる、という活動は、授業場面などごく日常的であるにもかかわらず、なかなか難しい。コミュニケーションのための知識や技能の練習だけでなく、体験を通しての充実感など、情意面への働きかけが重要である。

③ メディアについての知識・技能

教室をスタジオに見立て、ビデオカメラを設置するだけの簡単な環境づくりであったが、子どもたちにはメディアを用いた表現活動の方法や意義、そして問題点について多くのことを学ぶことができた。小5の子

どもたちは、ニュースといえども様々な表現の可能性があること、表現の仕方によって視聴者の受け取り方が大きく変わってくることを、情報発信者として責任や正しい倫理観をもつことなどを学ぶことができた。中2では、異なる役割をもった多くの人たちが協力し合っただけで番組ができること、討論番組でありながらフィクション性をもたせ、見せることを強調することによって新しい発見が生まれる可能性があることを学ぶことができた。「模倣」から「情報の加工」へという小学校から中学校への段階的な配列は、一つの試みとして可能性をもっているといえる。

④ 他者とのかかわり

私たちは本実践で、メディアの学習が、情報機器活用の技能や、テレビ番組制作についての知識の側面に偏らないように配慮した。そして、情報機器を手段として、子どもたちが互いを理解し合う活動になるように努めた。実際に情報機器を持ち込むと、表現の可能性が広がったり、取り扱う情報そのものの量が増大したりして、私たちが当初危惧した問題がたくさん生じるようになった。しかし、番組をつくるためには、共同作業を避けることはできない。自分が担う役割を子どもたちが自覚したとき、他者を理解し、自分の思いを他者に伝えようという活動が少しずつ見えるようになった。

先行実践・研究の中には、カメラの「撮る・撮られる」という特性に着目して、情報機器を他者理解・自己理解の方法として活用しようという試みが行われているものもある。このような優れた研究に学びながら、情報機器を効果的に用いて他者とのかかわりを作り出して実践を行っていきたいと思う。

6. おわりに

本稿は、小・中学校における国語科総合単元づくりのための基礎的研究として、とくにその指導の「系統性」に焦点をあてた。小学校5年生と中学校2年生における単元の実践と検討がそこでは中心となった。これは、国語科教育研究のなかでの国語能力の発達を対象とした研究において、この両学年が中学校までの9年間を通じてみたときに、重要な節目となる学年だとされているからでもある。

二つの学年の単元とも、「メディア」を中心的な素材としたものである。メディア・リテラシー（メディ

アを読み書きする能力）の育成は、今日の国語科教育研究においても重要な課題とされ、実践と研究がその緒についた段階にあると言える。今回の取り組みは、メディア様式の「模倣」を中心とした学習からメディア様式を用いた「情報の加工」を中心とする学習への展開を軸にしてメディア学習の系統を明らかにする上で大切な階梯であると考えている。

小学校5年生の単元では「子どもたちの表現に対する意欲が高まった」ということが重要であり、中学校2年生の単元では実際に番組をつくることによって「論理的」に構成を考える力や「見せる」ために表現する力の伸長が見られたということを中心に大きな意義とすることができるだろう。「5 考察」で集約したように、今回の二つの単元が「論理的思考力」を育てるための働きかけとなったこと、そして「コミュニケーション」「メディア」といった今日から将来にわたる言語生活において避けて通ることのできないことがらに目を向けていく視点を多くの児童・生徒が持ち得たことは重要な成果である。こうしたことが「自己と他者のかかわり」の原点となるだろう。

今後さらに、このような取り組みを継続しながら、教科指導における「総合単元」とそれが子どもにもたらす「力」とは何か、ということの研究していく必要がある。「総合的学習」の存在が問われている現在であるからこそ、このことを解明することは重要な課題である。なぜなら、情報の作り手になることと受け手になることとの双方の体験ができるような「サイクル」をつくり、「表現」という行為がなぜ大切なのかということを考える人を育てていくことが、OECDによる「生徒の学習到達度調査（PISA）」でわが国の高校生の得点の低さが問題とされた「読解力（Reading Literacy）」伸長の鍵を握ることだからだ。

本稿に報告した学習はメディアの形式を用いて情報をやりとりするコミュニケーションの学習であると言えるだろう。学習者は、既知の情報・知識をもとにして新たな情報・知識と出会いながら、読み・書き・聞き・話す活動を行った。一人一人が互いに読み手になり、書き手になり、聞き手になり、話し手となった。さらに単元の段階的配列をどのようにするかということを探り、「読解力（Reading Literacy）」を育む「サイクル」を築き上げていきたい。